
立海ホスト部、柳蓮二の野望

福寺なつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

立海ホスト部、柳蓮二の野望

【Nコード】

N9180F

【作者名】

福寺なつ

【あらすじ】

「樺跡でホストパレル」テニプリ（樺跡）ギャグ気味です。

「樺跡でホストパラレル」 1（前書き）

これはサイト「Banca」に載せたものです。

「樺跡でホストパラレル」1

「樺跡でホストパラレル」

立海ホスト部の評判を聞きつけ、氷帝テニス部では闇の会議が開かれていた。

「偵察部隊、ただいま帰還しました」

「御苦労」

偵察部隊2名は、場の視線を一身に集めながら着席した。

「それで、どうだった、立海は」

「盛況でしたね。敵は手ごわいですよ、監督」

やはり、と監督・榊太郎(43)は考え深げに頷いた。

「勝因は何だと思う、跡部」

偵察部隊その壱、跡部景吾は、

「そんな事より監督。男ふたりで他校のホスト部の催しに行くのは、大変だったのですが」

「ホンマやなあ」

「可哀相、樺地」

「跡部とふたりでなぜ？」

「考えてみそ、俺だったら絶対やだ」

「うるさい！お前ら！！だから変装して行ったんだろぅが！！」

偵察部隊その弐、樺地崇弘は、

「でもすぐ、バレました」

と、厳かに報告した。

一同が、より一層樺地に同情の目を向けたのは言つまでもない。

立海ホスト部、柳蓮二の野望。

切原赤也は全速力で走った。

「副部长……！」

「走るな、赤也！埃が立つ……！」

柳の叱責が飛ぶ。

当の副部长は部屋の隅で文化祭行事をサボっていた。真面目な彼も今日ばかりは勝手が違い疲れているようだ。

声もいささか、いかめしさがダウンしている。

「ここでは真田さんと呼べ。どうした赤也」

「俺の指名に男が入ってたツス……！！ジャッカルに回しますよ！」

返答したのは、今日は一層キビキビとしている柳だった。

「その客は、俺と約束があるんだ。赤也、お前の客扱いで頼む」

「柳先輩」

「蓮二も、やっと会計ではなくホストに回るのか」

「寝言を言うな、弦一郎。この部で会計が出来るのは俺しかないだろう。ホスト業はお前や赤也が、しっかりやれ。幸い、赤也と仁王目当ての客が多く、我が部の成績は好調だ」

柳の目はガラガラと光っていた。

同時に真田と赤也は戦慄した。

テニスで鍛え上げた勘が、赤信号を発している。

「真田さん、柳先輩の表情がイツちゃってるんスけど……」

「蓮二は業績データ分析に、のめり込んでいる……逆らわない方がいいぞ、赤也」

本人を目の前にして、真田も赤也も声をひそめず貶しあう。

しかし、貶された柳は、まさに受け流すこと柳の如しなのだった。

「でも柳先輩、何で俺の客扱いなんスか？回すんなら指名率低いハゲに……」

「……ジャッカルにはブン太をこれ以上太らせないよう昨日言っておいた。失敗した場合はふたりまとめて沖縄の比嘉中へ送る予定だ」

沖縄？

「ヒイイイイ、比嘉中ツスカー！ー！？」

すぐ横の立海テニス部文化祭出し物、ホスト部にまる聞こえの悲鳴を赤也は張り上げた。

（助けて、この人送られた比嘉中の都合も考えてねえよ！）

と、赤也は失礼な事を思った。

すでに赤也の中では、ブン太とジャッカルは沖縄人生なのだった。合掌。

「比嘉中で、ぼっちゃり系ホストの修行を積ませる、と言うとブン太も分かってくれたようだ」

まるで悟りきったかのような清らかささえ滲ませながら、柳は笑顔で言った。

鬼だ。

会計の鬼が、微笑んだ！

喰われる！！と赤也は心の底から、おののいた。

「それって丸井先輩に、柳先輩が分からせた、の間違いでしょうが！」

「第一、今日の客が赤也指名なのは事実だ」

柳は、そう言うとき細い目で赤也をテーブルに送り出した。

「どーも」

それだけ言うと、赤也は来客を眺めた。

こんな場所で見るとは思わなかった。それは赤也だけでなく、他の生徒も同じであろう。

何しろ、来たのはテニスでは有名な跡部景吾と……。

「護衛？」

跡部のツレの黒づくめスーツ、黒サングラスの大男（中味は樺地崇

弘)を見て、赤也は跡部に聞いた。

「アーン？これは樺地だ」

こうして隠密は終わった。

ジ・エンド。

(続く、次回「氷帝ホスト部、跡部景吾の野望リターンズ」)

「樺跡でホストパラレル」1（後書き）

2006年07月06日 19:40:53に

「樺跡でホストパラレル」

というリクエストを頂きました。
有難う御座いました。

（あとがき）

え？パラレルじゃないって？

大丈夫、第3部からパラレルになります。

第3部は「立海ホスト部、柳蓮二の野望リターンズ」です。

2006/9/4up

氷帝ホスト部、跡部景吾の野望リターンズ（前書き）

これはサイト「Banca」に載せたものです。

氷帝ホスト部、跡部景吾の野望リターンズ

「樺跡でホストパレル」

氷帝ホスト部、跡部景吾の野望リターンズ。

「アホだ」

「スパイの意味ねえ」

「ってか、跡部は最初っから正体バレバレ？」

氷帝テニス部文化祭で部費を集めよう会の面々は、異口同音に嘆いた。

「樺地の変装の意味ないよなー」

「いつそ、跡部もガチャピンみたいな全身着ぐるみで偵察に行くべきだったな、御苦労、い……」

「まだだ！話は終わってねえ！！」

監督が解散を言い切る前に、跡部は立ち上がり偵察の苦労の続きを語り始めたのだった。

（まだ樺地の羞恥プレー、続くのか！）

氷帝テニス部文化祭で部費を集めよう会員は、一斉に心の中でツッコミを入れた。

「えーと、それで何の用件で……。あ、真田副部長はホストしてないんすよ。柳先輩に、泣いて嫌だって泣きついて」

「泣いてなどおらん」

「イテッ！！」

暴力反対！と小突かれた頭を押さえながら、赤也は真田を怒った。

「よく来たな、跡部。」

ホスト遊びとは」

真田は丁重にウーロン茶をテーブルに置いた。

制服姿である。

遊び半分にスーツを着させられた赤也より、制服姿の真田のほうが遙かに老けているのは言わぬが花であろう。

「真田、ドリンクが減っている。3秒で買出しに行ってくれ」

柳が矢のごとき素早さで真田に伝令を飛ばし、光の如き速さで教室から叩き出したのを見て、赤也は、あんどりと口を開けて見送るしかなかった。

（武運を祈るツス、副部長）

6分前にも同じ伝令の元、5分後に帰って来た真田に柳は「沖縄の水は綺麗だそうだ」と意味の分からない脅し文句を真顔で言っていたのだ。

そのうち「ゴーヤ喰わすよ」と言い出しても不思議ではない、と赤也は文化祭の恐ろしさを思い知ったのだった。

「ゆっくりしていつてくれ、跡部」

柳は普通の顔で、跡部と樺地を歓待した。

「ボッタクリのようだな」

「何を言う、良心価格、適正価格だ」

（今のは、絶対、跡部さんの方が正しいツス！！）

実はメニューをいまだ見せて貰ってない赤也は、心の中で叫んだ。

「ボッタクリじゃー、東京は恐ろしいのう……」

「ここは神奈川ですよ、仁王君」

と、ここ数日先輩たちが、ひそひそと柳を恐れていたのを赤也も知っているのだ。

メニューは見ずとも、何を用意しているのかは赤也にも分かる。

（前日にクッキーをブン太先輩がつまみ食いして柳先輩にバレた時は、柳先輩の頭上にツノが見えたもんなー）

「とりあえず跡部がクツキーを5皿、だそつだ」

「誰もそんな事、言ってねえ——！！！！！！！！」

しかし、柳の野望は天よりも高く、

「樺地にこんな100均クッキー、俺が出すのを許すと思ってんのか!!!!!!」

（……100円クッキーしかないんですけど。）

勝手に始まったクツキー関が原の戦いをよそに、赤也と樺地は大人しくテーブルの端っこで水を飲んだのだった。

聞くも涙、語るも涙の攻防は、氷帝テニス部100円クッキーも美味しいよね？の会員、一同の涙を誘った。

と下克上、日吉はしみじみと語った。

と穴戸が一堂の心情を代弁した。

「ボツタクリホスト部で水しか飲まんかった、跡部と樺地が怖いわ……」

と忍足は偵察部隊の有能さに舌を巻いたのだった。

「ふむ、ボツタクリに加担せず一皿もクッキーを受け付けなかったとは、さすがだ。

御苦労、い……」

少々やつれぎみの監督の締めめに、待ったをかけたのは、

「だから！まだ偵察の本題に入ってません！！！！！！！！！！」

立海ホスト部でホテルやレストランやパーティシエやスイーツについてアホほど語って来た跡部景吾なのだった。

（続く）

氷帝ホスト部、跡部景吾の野望リターンズ（後書き）

2006年07月06日 19:40:53に

「樺跡でホストパラル」

というリクエストを頂ました。

有難う御座いました。

立海ホスト部、柳蓮二の野望リターンズ（前書き）

これはサイト「Banca」に載せたものです。

立海ホスト部、柳蓮二の野望リターンズ

「樺跡でホストパラレル」

立海ホスト部、柳蓮二の野望リターンズ。

「ホスト部のカラクリは、こうです」
跡部のインサイトによると。

「いらしゃい、あ、新婚さんいらつしゃいと、ちゃうで」
忍足侑士が軽くスベリぎみのギャグで来客を迎える。

笑顔が多少うさんくさくても、メガネがキラーンと光っていても気にしてはいけない。

忍足は、ホストというよりも仮装のようなタキシード姿だ。

日頃、テニスで鍛え上げた足は白きスーツに隠され、ボールを取る手は白手袋で包まれ、お客様をホスト部にいざなう。

席に案内されると、とりあえず鳳長太郎が笑顔でメニューを渡す。

「ウーロン茶、紅茶、コーヒー、コーラ、オレンジジュース、クッキーしかないですけど」

お客様がメニューを手にとると、すかさず、

「クッキーは、部長が今回、特別に」

と言いかけたところで、大抵のお客様の脳裏には、部長「跡部」お金持ち「ゴージャスの図式が浮かぶ。

ゴージャスなクッキーと紅茶を頼む。

「お砂糖は？」

文化祭の出し物だから、レモンとミルクは用意が難しくって、とゴージャスとは少し離れたフォローをしつつ。

俊足を生かした爽やかなウェイター、穴戸が「砂糖アリの紅茶とクッキー」の注文を持っていく。

と、同時くらいに、今度は「砂糖アリの紅茶とクッキー！」を向日岳人が持つてくる。

「あー、クッキーだー」

赤と黄色のサブボレーが席につくと、長身サブボレー鳳は次の接客につく。

なごやかに「せまい教室じゃ、ムーンサルトの実演は無理！」と会話をしつつ。

ジローが、ムシャムシャとクッキーを食べていく。

「食べすぎですよ」

と日吉がジローを追い出し、

「すみません。俺が下克上したあかつきには、もっと素敵な催し物をしますね」

と本気の目で詫びていく。

そんな、とお客様が謙遜せざるを得なかったところで真打ち、登場。

「アーン？誰が俺様に下克上だって？」

きゃーアトベさまーとコナミ特製効果音（反響つき）を、適当にジローがリモコン操作でプチッと押す。

御客様が効果音に驚いているうちに、樺地、日吉、ジロー、岳人でバリバリとクッキーを食す。

跡部と一般市民の会話限界時間は約1分を目処として、跡部は樺地が回収していく。

未知との遭遇を体験したあと、御客様が御会計。

「完璧だ」

「さすがデータ、博士だっけ、達人だっけ」

「最後の未知との遭遇がウリだよな。」

立海にはないウリだぜ」

「なかなかええポツタクリかたやなあ。」

クッキーは薄めにするか？」

「1個でも文化祭の売り上げでテニスボールを！会のメンバーは、くちぐちに相談を始めた。」

「よし、あとは任せよう。私はそろそろ帰る。御苦労、い……」

「立海と同じ催し物をこの俺がするわけないじゃないですか、監督」
跡部の目がクッキー関が原の戦いの頃に、戻っていた。

「とりあえず未知との遭遇をメインに時間計算すると、大体食券は去年より1割増しくらいですかね」

日吉が生徒会に提出する用紙の上で、鉛筆をトントンと叩いた。

「価格は500円くらい？ドリンクとクッキー一皿と未知との遭遇で」

鳳が去年の定価1500円テニス部食券を思い出した。

「クッキーは却下だ」

跡部が食券金額欄に1500円と、書き込んだ。

「跡部！……！」

3年生が非難の声をあげる。

「価格は下げるな、去年の客になめられる」

跡部はメニュー欄に「ケーキ」と書き込んだ。

「あああああつ、何、勝手に書いてるんですか……！！！！」

2年生が悲鳴をあげた。

「黙れ、メニューの手配は俺様がやる」

「……監督！」

跡部と樺地以外の2、3年生が叫んだが。

監督には会議がまさに踊っていることを音楽教師的に伝える気力すら残されていなかった。

ぼったくりホスト部で、跡部と柳がクツキー関が原の戦いを始めた頃。

すっかり赤也も忘れていた副部長、真田弦一郎がドリンクケースをかついでホスト部に到着した。

「遅い！」

柳は何往復ものの配達でへ口へ口の真田を一言、労うとすぐさまドリンクケースを開封した。

「……あれが辛いなのか」

「あれが辛いなんです、柳先輩が言っていました」

客に問われること数え切れずの柳蓮二の横暴ぶりに、赤也は諦めたように答えたのだった。

「そろそろ帰るか、樺地」

「ウス」

「……どっちが柳生か、気付いたか？」

「多分、銀髪の方、です」

「俺も同じ意見だ」

流れるようにかわされる会話に、赤也は目を丸くした。

（今日の銀髪が柳生先輩だって何で分かったんだ！！？）

「ちょ……！あんたら！！」

「アーン？俺様の樺地と俺様のインサイトをもってすれば入れ替わりくらい気付かねえわけがねえんだよ」

常識だろうと言わんばかりに俺様は言い切ったのだった。

「領収書は、結構だ」

跡部が赤也に1枚の紙を差し出した。

その紙をひと目見て赤也は顔をしかめた。

跡部と樺地が去った教室の隅では柳が今なお、真田をいたわっていた。

「弦一郎、六甲のおいしい水が1ケース足りないようだ。ついでにクッキーも買って来い」と

「言つとらん！！！！おい、赤也。どうし……」

ゆらりと近寄ってきた後輩に、柳と真田は不審な目を向けた。

赤也は、うやうやしく跡部のサインが入った紙を柳に差し出した。

「……金は？我が部は小銭ジャラジャラにこにこ現金払いだ……が……」

柳の顔色が変わる。

「ど、どうした蓮二！ついに天罰が下ったのか！」

トウツと真田の疲労した顎に柳のアップアが決まった。

「な、何をする、蓮二……」

「ああ、すまない、弦一郎、手が当たってしまったようだ」

棒読みで謝られ、しかも一瞥だにされぬままの状況に、真田は激しく抗議した。

「当たったって、思いっきりアップアだったではないか！」

「どうやら俺たち、まんまとスパイに手の内を知られたみたいツスねえ」

赤也は忌々しそうに去り行く氷帝を見送ったのだった。

「なぜ誰も俺の顎を心配せぬのだ……」

「あー、それは今は幸村部長の方が気がかりだからッス」

「そうだな、赤也。俺も少々、跡部を見くびっていたようだ」

跡部の支払い。

そこには一言、妙に達筆な字でひとこと。

「ツケにしといてやる」

と書かれていたのだった。

「ふざけた事を！跡部ともあろうものが、たるんどる！」

「跡部は損して得を取るようだ。ここに添え書きがある。幸村のサインだ」

「なに！？」

そこには、氷帝2人のホスト部招待と引き換えに、氷帝ホスト部が立海テニス部員レギュラーに限り氷帝文化祭に招待する事を、両校の部長同士が合意したという内容であった。

「部長も何でまたスパイに合意してんですか」

「だが、蓮二。こちらの招待がふたりで、向こうが……8人では、向こうの負担が大きいのではないか？」

「違うな、弦一郎。そのような寝言を言っているからお前には会計をさせなかったのだが、俺のデータは正しかったようだ。

いいか、弦一郎。うちのホスト遊び費は入場無料、ドリンクお菓子別途徴収制だ。

これは俺が最初から会員制チケット販売制とどちらがより売り上げがあがるかを考慮した結果、取った苦肉の選択だ。

おそらく料金的には、最終的にはどちらも僅差になるだろう。だが」

「あのー……副部長、それに言いたかないんですけど、これって行かなきゃなんないって命令ですよ、氷帝に」

「そうだ、向こうはぬけぬけとスパイに来て置いて、こちらを招待するというのが。」

氷帝テニス部は代々、高価プレミアチケット完全前売り制と当日券の伝統を誇っている。

おそらく今年も跡部が同じ戦略で来るだろう。

いいか、価格は去年1枚1500円だった」

「な！なぜそんなに高額なのだ！」

「出るものが高額だからだ。去年は劇場ばりの無駄に煌びやかな演劇部と共同でカフェーをしたそうだが。」

無農薬が売りのサンドイッチと跡部お気に入りのロースとビーフというメニューだったそうだ」

「なんだ、それは。文化祭なのか？」

「きつと予算と資金が違うんすよ。だから100均クッキーも見ただけで分かるんすよ」

「それに8人も招待とは、跡部も」

「そこだ！」

「え？」

「だーかーら、あの人ら自費で遊んでいったつしょ？水一杯だけで俺たちも遊びに行ったら1500円自費なんじゃねーんすか？」

「どういふつもりなのだ、幸村……」

柳と真田の疑問をよそに氷帝テニス部200名は、期日どおりに催し物の書類提出を済ませ、例年通りに前売り券を完売させた。

飛ぶように売れた1500円チケットが、更に当日も未知との遭遇を求め売り切れることは明白だったのである。

氷帝テニス部完。

コンプリート・スペシャル・データ。

時は立海ホスト部、文化祭二日目。

「話が違う」

準備に追われ、慌しく柳の指示のもとコキ使われる部員達の中、ある男たちが深刻な顔で話し合っていた。

「入れ替わってラクしよう思たのに」

いつも通りの、表情が読めない詐欺師は、あっけらかんと言っていた。

それに対し共犯者は冷静に返答していた。

「約束が違うのは君のほうでしょう。昨日は私が仁王雅治として接客したのですから、今日は」

「お前のせいで、今日の俺の指名が増えとる。

俺は楽なほうがええんじや。だから、今日もお前さんがニオウマサハルな」

「君こそ私の名で人を口説くのは止めたまえ」

「口説いとらん。柳が」ジューズのお代わりは如何ですか？」言うただけじゃ」

「その後」紅茶はカテキンが」とか、みもんたみたいな事を言ったのは君でしょう！彼女たちが、それから4杯も紅茶を飲んだのには驚きましたよ。

反省したまえ！！」

数秒の沈黙が落ちる。

言い出したのは、どちらであつたのか。

「……ジャンケン」

「……勝った方が？」

「……好きなほうを選ぶ、最初はグー！」

かくて、勝負は決まった。

「今日は、私が柳生比呂士です」

「さっそく人の声を真似るんじゃない！この詐欺師がッ！」

部員を手足のごとくホスト部の準備に駆け立てた達人、柳は、「柳生が仁王にジャンケンで負ける確率98……」

と、いつの間にやらしっかりとデータをはじき出していた。

「……柳君……」

「……仁王、今日もしっかり客人たちをもてなしてくれ」

柳生と仁王が逆らわなかったのは、言うまでもない。

コンプリート・データ『ふたりのホスト』完。

（終わり）

立海ホスト部、柳蓮二の野望リターンズ（後書き）

2006年07月06日 19:40:53に

「樺跡でホストパラレル」

というリクエストを頂きました。

有難う御座いました。

これでホストパラレルは終わりです。

2点ばかり書かなかった箇所があるんですが（当日の跡部のホストぶりと幸村のサインのいきさつ）

長くなるのでカットしました。

機会があれば（拍手お礼文にしようかと思ったけど、拍手あんまり押されないしねー、ははははは……）

跡部さんはホストでも頂点、目指せると思います。

樺地は……：そういえば、そのところを今回カットしたような……。

まあ大丈夫です。彼はテニスも偵察もホストも抜かりありません。樺地ですから。

今回、お蔵入りする予定だった立海文化祭ネタを全部ぶち込んでみました。

お蔵入りの理由は、今年の1月、7月と荒らしに好き放題言われて、すっかりテニプリを更新する気が減ったからです。

（荒らしに絵が下手！と言われてガンガン小説を更新するわけないじゃないですか、当然の帰結です。

それにしても、ただでさえサッカーとリボンしか当時、更新できてなかったのにわざわざテニプリに

荒らしコメントを送ってくるなんて、どれだけ私にテニプリの更新をして欲しくないんだと寒気がしました。

荒らしはテニプリは巨大ジャンルだから下手な書き手が減ろうとも
悲しみは感じない幸せな人なのでしょ（うか）

今回は氷帝と立海というふたつのワールドを比較してみました。
だからこれはパラレルなのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9180f/>

立海ホスト部、柳蓮二の野望

2010年10月10日14時44分発行